

第32回 くにたち兼松講堂 音楽の森コンサート

吉野直子の華麗なハープの世界

指揮：高井 優希

管弦楽：兼松講堂シンフォニエッタ



2018年5月13日(日) 午後2時開演

一橋大学兼松講堂

主催:ボランティアチーム如水コンサート企画

後援:(社)如水会・新三木会・国公立市・国公立市教育委員会・国公立市社会福祉協議会・(公財)くにたち文化・スポーツ振興財団・国公立市商工会
国公立市観光まちづくり協会・国公立市商業協同組合・国公立商工振興(株)・国際ソロプロチミストくにたち

協力:一橋大学管弦楽団、「Caféここたの」(一橋大まちづくりサークル)

兼松講堂へようこそ

2005年から始まった「くにたち兼松講堂 音楽の森コンサート」は、お陰さまで、14年目、第32回目を迎えました。単なる名曲コンサートではなく、大学の講堂で行なうに相応しいテーマを掲げた公演、あるいは斯界で活躍する一流の演奏家の招聘を企図していますが、今回は、世界のハープ界で最も注目されている逸材・吉野直子さんを、12年ぶりにお招きいたしました。

吉野さんは、2000(平成12)年6月『一橋大学創立125周年記念演奏会』にフルートのW.シュルツ氏(ウィーン・フィル首席奏者)・オーボエのH.シェレンベルガー氏(ベルリン・フィル首席奏者)とともに来演。次いで2006(平成18)年5月、第4回「くにたち兼松講堂 音楽の森コンサート」ではこの2氏に加えてウィーン・フィルやベルリン・フィル等の管楽器の首席奏者ともども、再度来演しています。

3回目のご出演となる今回は、バロックから近・現代までの作曲家によるソロと協奏曲の多彩なプログラムをご披露していただきます。

プログラム後半の協奏曲を協演するのは過去2回の演奏会にも出演し健闘した一橋大学管弦楽団の精鋭たちで、今回は「兼松講堂シンフォニエッタ」として協演いたします。

桐朋学園大学の西原稔先生には、今回も当コンサートのナビゲーター役をお引受けいただきており、改めて厚く御礼申し上げます。

また、本公演にあたり、(公財)くにたち・文化スポーツ振興財団の助成ならびに地域の有名店各社のご贊助を頂いております。変わらぬご支援に感謝申し上げます。

なお、当講堂は歴史的建造物(政府登録有形文化財)でもあり何かとご不便をおかけいたしますが、このホールのもつ自然な響きの中で、どうぞ最後までごゆっくりお楽しみ頂ければ幸いでございます。

ボランティアチーム 如水コンサート企画

Program

J. B. ルイエ：
Jean Baptiste Loeillet (1680–1730)
(arr. by M. Grandjany)

トッカータ Toccata
(M. グランジャニー編)

J. S. バッハ：
Johann Sebastian Bach (1685–1750)
(arr. by D. Owens & N. Yoshino)

シャコンヌ Ciaccona※
(D. オーウエンズ／吉野直子編)

※無伴奏ヴァイオリン・パルティータ 第2番 BWV 1004 より
from Partita for Solo Violin No. 2, BWV1004

J. R. シューマン：
Robert Schumann (1810–1856)

アラベスク Arabeske, Op.18

H. ルニエ：
Henriette Renié (1875–1956)

黙想 Contemplation

G. ピエルネ：
Gabriel Pierné (1863–1937)

アンプロンプチュ・カプリース Impromptu-Caprice
〔奇想的即興曲〕

休憩 (20分)

G. F. ヘンデル：
Georg Friedrich Händel (1685–1759)

ハープ協奏曲 変ロ長調 Op.4-6
Concerto for Harp and Orchestra in B-flat Major

- I. Andante allegro
- II. Larghetto
- III. Allegro moderato

J. ロドリーゴ：
Joaquín Rodrigo (1901–1999)

アランフェス協奏曲 Op.30
Concierto de Aranjuez for harp and orchestra

- I. Allegro con spirito
- II. Adagio
- III. Allegro gentile

Profile

吉野 直子 (ハープ) Naoko Yoshino



©Akira Muto

ロンドンに生まれ、6歳よりロサンゼルスにて、スザン・マクドナルド女史（インディアナ大学教授）のもとでハープを学び始めた。1981年に第1回ローマ国際ハープ・コンクール第2位入賞。1985年には、ハープの世界的コンクールである第9回イスラエル国際ハープ・コンクールに参加者中最年少で優勝、ズービン・メータ指揮イスラエル・フィルとの協演で国際的キャリアの第一歩を踏み出した。

これまでに、ベルリン・フィル、イスラエル・フィル、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管、フィルハーモニア管、フィラデルフィア管、ウィーン・コンツェントゥス・ムジクスなどのオーケストラや、アーノンクル、メータ、ブーレーズ、プロムシュテット、メニューイン、小澤征爾など、国内外の著名オーケストラや指揮者と共に演奏を重ね、リサイタルもニューヨーク、ウィーン、ロンドン、東京などで数多く行っている。また、ザルツブルク、ルツェルン、セイジ・オザワ松本フェスティバルなど、世界の主要音楽祭にも度々招かれ、常に好評を博している。

室内楽の交流も幅広く、ヴァイオリンのクレーメル、ヴィオラのV. ハーゲン、今井信子、チェロのC. ハーゲン、フルートのニコレ、ランパル、シュルツ、パユ、ホルンのバボラークなどと共に演奏を重ねてきた。また、ハープの新作にも意欲的に取り組み、数々の名曲を初演している。

レコーディング活動も活発で、これまでにテルデック、フリップス、ソニー・クラシカル、ヴァージン・クラシックス等に多数の録音がある。2015年末には、オーヴェルニュ室内管と共に『ハープ協奏曲集』を仏 Aparte から発売し、非常に高い評価を得た。また、今までの演奏活動を集大成すべく自主レーベル grazioso を創設、これまで『ハープ・リサイタル～その多彩な響きと音楽』、『ハープ・リサイタル2～ソナタ、組曲と変奏曲』、『ハープ・リサイタル3～バッハ・モーツアルト・シーベルト・ブラームス他』がリリースされている。このシリーズは、ソロ作品を中心とし今後1年1作のペースで継続される予定である。

1985年アリオン賞、1987年村松賞、1988年芸術祭賞、1989年モービル音楽賞奨励賞、1991年文化庁芸術選奨文部大臣新人賞、エイボン女性芸術賞をそれぞれ受賞している。

国際基督教大学卒業。

www.naokoyoshino.com/

高井 優希 (指揮) Yuki Takai



©Masaaki Hiraga

2015年、第4回黒海指揮コンクール（コンスタンツァ）第1位。これまでに、東京フィルハーモニー交響楽団、仙台フィルハーモニー管弦楽団、セントラル愛知交響楽団をはじめ、国内外の数多くのオーケストラと共に演奏を重ねている。

幼少よりピアノを学び、成蹊高等学校卒業後、東京藝術大学指揮科およびライプツィヒ・メンデルスゾーン大学指揮科卒業。

東京藝術大学在学中より、オペラ・オペレッタ公演の副指揮者を務める。主要な公演では、東京室内歌劇場「アルレッキーノ」「青空を射つ男」（2004年）、藤沢市「モーツアルト・イヤー特別公演」（2006年）、藤原歌劇団「ラ・ボエーム」（2007年）、日本オペラ団体連盟人材育成公演「魔笛」（2007年）、東京二期会「魔笛」「ウィーン気質」（2015年）など。

また、メンデルスゾーン大学在学中に、イエーナ・フィルハーモニー、ライプツィヒ交響楽団（旧・西ザクセン交響楽団）、ムジカーリッシェ・コメーディエ・オーケストラ（ライプツィヒ）を指揮したほか、2011年には、大友直人氏のアシスタントとして、スイス・ロマンド管弦楽団楽団員によるアンサンブルを指揮している。

Ulrich Windfuhr、田中良和の各氏に指揮を師事。また、Jorma Panula、Colin Metters、Ervin Acél、小林研一郎、佐藤功太郎、小田野宏之、松尾葉子の各氏の薰陶を受ける。

2016年より、武蔵野音楽大学非常勤講師も務める。一橋大学とは、管弦楽団の指導を長く務め縁が深い。

西原 稔 (ナビゲーター) Minoru Nishihara



山形県生まれ。東京藝術大学大学院博士課程満期修了。桐朋学園大学音楽学部教授。

18、19世紀を主対象に音楽社会史や音楽思想史を専攻。著書に『音楽家の社会史』、『聖なるイメージの音楽』、『音楽史ほんとうの話』、『ブラームス』、『シューマン全ピアノ作品の研究』（以上、音楽之友社）、『クラシック名曲を生んだ恋物語』（講談社）、『「樂聖」ベートーヴェンの誕生』（平凡社）、『クラシックでわかる世界史』、『ピアノ大陸ヨーロッパ』（以上、アルテスパブリッシング）、『世界史でたどる名作オペラ』（東京堂出版）、『ピアノの誕生・増補版』（青弓社）などの著書のほかに、共著・共編で『ベートーヴェン事典』（東京書籍）、訳書に『魔笛とウィーン』（平凡社）、監訳・共訳で『ルエル』、『金色のソナタ』（以上、音楽之友社）、『オペラ事典』、『ベートーヴェン事典』（以上、平凡社）などがある。

兼松講堂シンフォニエッタ

「くにたち兼松講堂 音楽の森コンサート」に来演する一流演奏家と協演するため、一橋大学管弦楽団の現役ならびにOB・OGの選抜メンバーで特別編成されたオーケストラ。同団は1919(大正8)年の創立。日本のアマチュア・オーケストラの中では古い歴史を誇り、まもなく創立100周年を迎える。

他大学からも有志が参加し常時100人程度の団員を抱え、年3回のコンサートを行っているが、メインの定期演奏会は1953年にスタート、本年12月には66回目を迎える。2001年にはドイツで公演、2007年には、イングリット・フリッター(2000年ショパン国際コンクール第2位)と協演。

H. J. シェレンベルガー(指揮・オーボエ、元ベルリン・フィル首席オーボエ奏者)やウラジミール・アシュケナージ(ピアノ・指揮、前NHK交響楽団音楽監督)が練習の指揮台に立ったこともある。

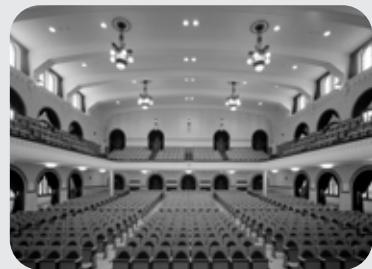
1st Violin	○荒木 穂香 中村 隆宏	池田 健峰 藤井 瑞奈	岡村 昂洸	小染 慶	堺 理聰	中野 夏実*
2nd Violin	遠藤 鳩 高橋 佑希	落合友佳里 田村奈津子	片岡 拓巳	小林 奏詠 ○鈴木満理奈	大聖 実奈	
Viola	岡崎 碧	田中 優 ○平田 拓也		前田あゆ美	水野未宙也	宮崎 春菜
Violoncello	○加藤 碧子	小林 桜子 ○櫻井 望	斎藤 恵*	西村 彩織		
Contrabass	石附鉢之介		小島 辰仁			
Flute	○住岡由梨奈	渡邊 雅				
Oboe	○寺田吉太郎	菅野 勇斗				
Clarinet	○市村 広奈	山岸 雄作				
Bassoon	○萩田 智樹	野口 淑太				
Horn	○釣部 祐希	清水 鳩太				
Trumpet	○加藤 恵美	戸辺 悠大				

* ○はパートトップ、*は賛助

“音響オンリーワン、環境ナンバーワン”一橋大学兼松講堂

武蔵野の面影が残るキャンパスの一角に佇む一橋大学のシンボル的建物・兼松講堂(政府登録有形文化財)は、その響きの良さから、創建(1927年)以来、内外の代表的音楽家が多数来演、近年ではチェコフィルハーモニー(指揮アシュケナージ&ピアノ)やウィーンフィル・ベルリンフィルのトップ奏者たちが演奏するなど、コンサート・ホールとしても親しまれています。

2004年3月、一般社団法人・如水会(一橋大学の同窓会組織)による募金活動により77年ぶりに音響的にも配慮された大改修が行われ、自然な響きを持った本格的なコンサート・ホールとして蘇ったのを機に、翌2005年から「くにたち兼松講堂 音楽の森コンサート」や一橋大学管弦楽団の演奏会が定期的に行われています。



ステージより客席を望む



中庭に面した明るく落ち着いた
雰囲気の店内でイタリア料理を
お楽しみください

お電話でのご予約をおすすめします

リストランテ国立文流 TEL.042-571-5552

東京都国立市東 1-6-30 パティオマグノリア1F(JR 国立駅(南口)より徒歩3分)

◆営業時間：昼 11:30～14:30(L.O.) 夜 17:00～21:00(L.O.)

姉妹店 リストランテ高田馬場文流 TEL.03-3208-5447



Program Note

J. B. ルイエ(1680-1730) トッカータ(M. グランジャニー編)

バッハとほぼ同時代のベルギーの作曲家。1705年頃からロンドンに定住。オーボエ・フルート・チェンバロ奏者として活躍する一方、各種楽器のための室内楽曲を残している。グランジャニー編曲による〈トッカータ〉は流麗にして可憐な小品。

因みに、編曲者のグランジャニー(1891-1975)はフランスのハープ奏者兼作曲家。主にアメリカで活躍。8歳でH.ルニエに師事している。

J. S. バッハ(1685-1750) シャコンヌ(D. オーウェンズ／吉野直子編)

「無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第2番」の有名な第5楽章“シャコンヌ”は、冒頭の8小節の荘厳な主題から導かれる29の変奏からなる、バッハの“音宇宙”。

この曲から創作意欲をかき立てられた音楽家は多く、ブラームス(1833-1897)は左手だけのピアノ独奏用に編曲してクララ・シューマンに捧げ、後年、凄腕のピアニスト兼作曲家のブゾーニ(1866-1924)も両手のためのピアノ曲に編曲。管弦楽版としては指揮者ストコフスキ(1882-1977)や“サイトウ・キネン・オーケストラ”として名を残す齋藤秀雄(チェロ奏者・教育者／1902-1974)による編曲がよく知られている。

このハープ版は、アメリカのハープ奏者デューイ・オーウェンズの編曲に吉野直子さんが手を加えたもの。

R. シューマン(1810-1856) アラベスク Op.18

よく知られた「子供の情景」が作曲された翌年(1829)、この曲が完成。“アラベスク”とは、アラビアの工芸品や建築装飾にみられる「唐草模様」を指すが、装飾性のある繊細なタッチの楽想で書かれた作品の名称として、シューマンが初めて採用した。

曲は、冒頭で演奏される主題が中心となってロンド風に心地よく展開してゆく。

因みに、吉野直子さんの最初のCD(1987年録音)は『アラベスク』(SONY)のタイトルで、ドビュッシーの「2つのアラベスク」(H.ルニエ編曲)が冒頭に収められている。

H. ルニエ(1875-1956) 黙想

アンリエット・ルニエはフランスのハープ奏者。11歳でパリ音楽院ハープ部門で1等賞を獲得し、早くから天才少女として注目を集めた。演奏家、作曲家、編曲者としてハープのレパートリーを拡げるのに多大な貢献をした。美しく祈るような「黙想」は小品ながら、敬虔なカトリック信者であったH.ルニエの深い信仰心を表している。

ルニエの孫弟子にあたる吉野さんは、「私にとって宝物のような一曲」と述べている。

G. ピエルネ(1863-1937) アンプロンプチュ・カプリース [奇想的即興曲]

フランスの作曲家、指揮者、オルガニスト。パリ音楽院で、フランク(オルガン)、マスネ(作曲)らに師事。1882年、若手作曲家の登竜門であるフランスの芸術賞のローマ大賞を獲得。その後、ハープのためのこの技巧的な曲が書かれている。

カデンツァ風の前奏に續いて心浮き立つような歌が姿を現し、次いで軽快なテンポの情熱的なボレロ風の旋律にとって代わるが、やがて最初の歌が華麗な装いで再現し、華やかに曲を閉じる。ハープのレパートリーとしては演奏機会の多いポピュラーな作品。



～生菓子も焼菓子も‘ぐにたち’がいっぱい詰まっています～

‘ぐにたち’らしい‘ぐにたち’だけのお菓子がここにはあります



洋菓子

国立白十字



南口店 国立市中1-9-43 042(572)0416
富士見台店 国立市富士見台1-37-28 042(572)1718

G. F. ヘンデル(1685-1759) ハープ協奏曲 変口長調 Op.4-6

ヘンデルは、奇しくもバッハと同年の1685年にドイツのハレで生まれ、ハレ大学で法律を学ぶが、ハンブルク歌劇場で活躍。その後イタリアに渡ってイタリア後期バロックオペラを学んだ後、ハノーファ選帝侯の宮廷楽長に就任するも、1710年、25歳でロンドンに渡り市民権を得て、1759年ロンドンで没するまでイギリスで活躍した。「メサイア」などの多くのオラトリオ、「リナルド」など数々のオペラ、「水上の音楽」などの管弦楽曲等々、傑作を残している。

「ハープ協奏曲」は、1735～6年に作曲された6曲からなる作品4の「オルガン協奏曲」の第6番が原曲で、当時のハープの名手のためにヘンデル自身が「ハープ協奏曲」に編曲した。繊細だが音量の乏しいハープのために、弦楽器群は弱音器を付け、低弦は弦を指先ではなくピックで演奏する。

第1楽章：アンダンテ・アレグロ、変口長調、4/4拍子。明るく典雅な生命力に溢れる。

第2楽章：ラルゲット、ト短調、3/4拍子。オーケストラは殆ど休み、独奏ハープの情緒豊かな独り舞台の趣き。末尾のカデンツアはM.グランジャニーによる。

第3楽章：アレグロ・モデラート、変口長調、3/8拍子。軽快なメヌエット風の楽章。ここでもオーケストラは控えめでハープ・ソロが活躍する。

J. ロドリーゴ(1901-1999) アランフェス協奏曲 Op.30

20世紀スペインの作曲家ホアキン・ロドリーゴは、幼時に失明したが楽才に恵まれ、バレンシア音楽院で作曲とピアノを学び、1927年、パリのエコール・ノルマルでデュカス(1865～1935)に師事。スペイン内戦(1936～39)の間はドイツやフランスに滞在するが、1939年に帰国しマドリードに定住。

1939年、パリで作曲したギターと管弦楽のための《アランフェス協奏曲》が、翌‘40年、バルセロナで初演され大成功を収め、以後、スペイン楽壇の大家とみなされるようになった。1973年に来日。

“アランフェス”はスペイン中部の首都マドリードの南方、スペイン王室の離宮と庭園のある小さな町。スペイン内戦下、古き良き時代の歴史と郷愁に惹かれるロドリーゴが、19世紀初頭のアランフェスの街を描いた作品。

1964年、友人でハープの名手ニカノール・サバレタのために編曲したのが本日演奏されるハープ版。ロドリーゴはこれを大変気に入り、その後、2曲のハープ協奏曲を作曲している。

第1楽章：アレグロ・コン・スピリート、二長調。序奏でハープが奏でるスペイン風リズムで始まり、弦楽合奏がこのモティーフを繰り返す。続く主部の第1主題もこのリズムに乗って色鮮やかに展開された後、最初の動機が戻って来る。

第2楽章：アダージョ、口短調。幻想的な緩徐楽章で全曲の演奏時間のほぼ半分を占める。

冒頭のイングリッシュホルンで奏される哀愁溢れる旋律はポピュラー音楽としても様々に編曲されており、この曲を有名にしている。スペイン南部は8世紀から数世紀間、イスラムの支配下にあったためか、郷愁の中にイスラムの香りも漂うようだ。

第3楽章：アレグロ・ジェンティーレ、二長調。2拍子と3拍子の複合拍子が頻繁に現れる快活なロンド形式で、ハープと管弦楽の活発な掛け合いが展開された後、末尾では消え入るように曲が閉じられる。

1,700種類を超えるワインは最適な環境で、お手元に届く日を待っています



せきやは、みなさまの暮らしのひとときを彩ります

SAKE-BOUTIQUE
SEKIYA 
Depuis 1910

国立せきやはビル1F・B1F
☎042-576-3111(代表)
☎042-571-0001(店・直通)
営業時間／11:00～22:00

立川 JR 国立駅 新宿
銀行 南口 タリース 
国立せきやはビル